

振動～騒音～チャンソン
ほどよさを求めて

黒田 道雄

インタビュアー：近森 順

2011年6月27日
アルカディア市ヶ谷



公益社団法人自動車技術会

振動～騒音～シャンソン ほどよさを求めて

ゲスト 黒田 道雄 / インタビュアー 近森 順

2011年6月27日(月) 於 アルカディア市ヶ谷



GUEST

黒田 道雄 (くろだ みちお)

1935年 東京都で生まれる
東京都立日比谷高等学校、
東京大学、同大学院博士課程修了、工学博士

1964年 成蹊大学助教授、1974年 同教授

1993年 財団法人日本自動車研究所 理事

1995年～1997年 社団法人自動車技術会 副会長

1995年～2011年 財団法人自動車製造物責任相談センター
審査委員

2001年 成蹊大学名誉教授、自動車技術会 名誉会員

1992年 社団法人日本シャンソン協会 正会員
日本シャンソン協会理事の宇井あきら氏にシャンソンを師事。
訳詞・作詞・作曲・ピアノ弾き語りに力を入れている。
20年以上にわたり下記の自主企画コンサートを開いて、黒田道雄の詩の世界を紹介している。
シャンソンコンサート NO.1(1986年)～NO.17(2011年)
シャンソン探訪会(1)(1999年)～(15)(2009年)
コンサート・探訪会の詳細資料についてはお問い合わせ下さい。

INTERVIEWER

近森 順 (ちかもり すなお)
公益社団法人自動車技術会・名誉会員



(所属は、インタビュー実施時のものです)

－ 目 次 －

学生時代	1
成蹊大学時代	6
自動車技術会とのかかわり	8
政府機関等とのかかわり	11
シャンソンに魅せられて	17
ほどよさの追求	21
若者へ	23

□ 学生時代

近森 我国の自動車産業は世界をリードするまでになりましたが、これも諸先輩の方々の情熱と努力によるものです。自動車技術会では、これらの方々から、研究業績に関わるお話しや、ご苦労したお話しなどをお聞きし、それらを記録に残す事業を行っております。本日は、振動に関する研究で知られ、各種政府系委員会でも活躍された黒田名誉会員からお話しをお聞きすることになりました。また、自動車技術会での活動や趣味であるシャンソンについてもお聞きし、黒田名誉会員の人間像の一端に触れることができると思います。私は、黒田先生と成蹊大学で11年間ほどご一緒させていただいたというご縁により、本日インタビュアーをさせていただくことになりました。よろしくお願いたします。

黒田 こちらこそ、よろしくお願いたします。

近森 本日は、記録に残っていないような事についてもお話しいただき、後輩の参考にさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いたします。まず、学生時代から卒業までのお話しをお聞かせ下さい。特に、博士論文のテーマや内容、それから自動車技術会にはかなり早くに入会されていますが、その辺の動機などもお聞かせ下さい。

黒田 1935年に東京で生まれましたが、小学2年から中学2年まで、愛知県中島郡（現 稲沢市祖父江町）に縁故疎開しておりました。戦後4年ほど経てから、父の勤務先の関係で東京都大田区に戻り、大森第七中学校に転入しました。その後、都立日比谷高校、東京大学理科I類、東京大学大学院に進んだあと、1964年の春に学位取得と同時に成蹊大学で教職に就くことになりました。卒業研究は、学部の4年のときにやりました。津田先生¹⁾の研究室に所属していましたが、設計製図のほうは4気筒水平対向エンジン、実験のほうは予燃焼室型ディーゼルエンジンの燃焼実験をやりました。いずれも自動車用エンジンだったということで、自動車に関係しはじめたのは大学4年の頃だと思います。設計製図は1人ずつやっていましたが、実験は3人でやっていました。津田先生は、藤井先生²⁾などと並んで、当時の東大機械科を担っておられた先生ですが、非常に真面目で怖い先生でした。私ともう1人は麻雀が好きだったので、実験がうまくいかなくなると、昼から麻雀に行ってしまう。1人残った一番真面目な男だけで実験をやっていて、先生が見回りにくると「ちょっと本屋に行っています」とか言ってごまかしていたのですが、結局はばれてしまいました。東大の正門前に本屋がありましたが、そこを通り抜けて奥へ行くと麻雀屋でした。小さい頃から理数系と英語は好きでしたが、高校時代からは数学、物理、英語はだめだという自覚を持ち始めました。何故かというと、高校時代に周りにすごく優秀な人が大勢いて、先生の代講をしているような人もいて、そのような気持ちになりました。理科I類に進んだのは理数系が得意だったからですが、機械工学科に入ったのは非常に単純な理由でした。私の従兄弟と叔父が東大の機械を出てエンジニアになっていたのも、何となく行って



高校時代のクラスメイトとの麻雀 (1978年春)

しまったというところです。本当は、応用物理学科とか応用数学科のほうが好きだったので、授業がよくわからなくて、成績もAとかBはとれず、Cが多いような学業成績でした。大学2年のときに、専門課程への進路を決定するのですが、自分の成績では希望するような学科に進むのは難しいということになり、機械工学科へ進みました。機械工学科に進学しましたが、

授業は非常に難しく感じました。自分の専門となる振動工学というのは、藤井先生が講義をしていました。これが、ほとんどよくわかりませんでした。先生は大変立派な研究者であり、教育者でしたが、いつも黒板に向かって講義をしていましたので、顔は殆どこちらに向けませんでした。声は、後ろのほうに座っていると殆ど聞こえなかった。これでは授業に出ても仕方ないということで、先生が執筆された本を買って、それで勉強しました。機械工学科の授業はよく欠席しましたが、そのうちの半分は遊び、半分は家にて本で勉強していました。私の頃は、大学の先生には研究者としては優れた人が多いのですが、小中学校の教員免許状のようなものがないので、教え方とか、話し方とかが十分訓練されていない人が多かったようです。今でもあまり変わっていないと思いますが、そういう意味では、自分が非常に興味を持てる授業以外は、本を買って勉強するのが一番だと感じております。

1) 津田先生：故 津田公一氏（東京大学教授、自動車技術会正会員）

2) 藤井先生：故 藤井澄二氏（東京大学教授、自動車技術会正会員）

近森 津田先生も立派な本を出されていると思いますが。

黒田 書かれております。

近森 たしか、エンジンか何かの基礎理論でシリーズの厚いものでした。燃焼ではなく、殆ど機械力学だったと思いますが、未だに持っています。

黒田 その意味では、大変尊敬している先生です。そのようなことをしながら卒業になるわけですが、卒業実験の仲間2名は三菱重工業とトヨタ自動車に就職し、私だけが大学院に行きました。同級生が50人位いるのですが、大学院に進むのは1割程度でした。大学院で希望する研究室はありましたが、成績の関係で本郷の研究室へ行くのはあきらめ、生産技術研究所に進みました。当時、生産技術研究所は西千葉にありまして、自動車関係で著名な平尾先生³⁾、亘理先生⁴⁾、石原先生⁵⁾がおられまして、大変魅力が

あるところでした。ただ、自宅から西千葉までは片道2時間かかり、大変な思いをしました。修士課程が終わって、博士課程2年目くらいに西千葉から六本木に移転しました。その六本木も、今では国立新美術館になってしまいました。

3) 平尾先生：故 平尾収氏（東京大学生産技術研究所教授、自動車技術会名誉会員）

4) 亙理先生：故 亙理厚氏（東京大学生産技術研究所教授、自動車技術会名誉会員）

5) 石原先生：故 石原智男氏（東京大学生産技術研究所教授、自動車技術会名誉会員/元副会長）

近森 そうですね、変わってしまいました。

黒田 綺麗な美術館が建ちましたが、当時は駐留米軍の兵舎で、ハーディ・バラックスと呼んでいました。もともとは、我国最初の鉄筋コンクリート造りの兵舎である旧陸軍一師団歩兵第三連隊の兵舎でした。今では、極一部分が新美術館の一角に保存されています。

近森 平面の形は、「日」の字の角を取ったような形の建物であったと思います。

黒田 そうですね。地下1階、地上3階で、どこかの刑務所のような感じでした。(笑)

近森 学校という感じではなかったですね。

黒田 西千葉から、六本木へ引っ越すことになりましたが、その頃ちょうどドクター論文の2年目で、車軸が動き出して振動するのを測定する実験装置がやっと完成したというときでした。先生も助手も院生も全員、引越し騒動で、殆ど1年ぐらいは引越しのために時間を使ってしまったような気がします。

近森 千葉のほうには何度か行ったことがあるのですが、何か小中学校の校舎のような感じでした。

黒田 そうですね、設備はよくなかった。院生もいましたが、やはり遠いということで、自動車に携わった方などは希望することもありましたが、希望者は少なかったですね。航空研究所など、東大の附属研究所の中でも、あまり評判は高くなかった。

近森 歩くと、床がぎしぎししているように思いました。(笑)

黒田 そうでしたね。まあ、そこを出られたという意味では幸せでした。六本木では、地下1階が亙理先生の研究室になりました。そこでは自動車の実験はできないので、中庭に造ってもよいという許可を無理矢理取りました。そこに、我々も手伝ってピットを掘ることからはじめ、もとの実験装置を造りました。大学院へ進んだ同級生は、2年、3年、5年で卒業しましたが、私だけが6年やりました。実験室が移転したこともありますが、もう少し実験能力、研究能力が高ければ、移転があっても5年で卒業できたのかなと、反省しています。

近森 博士論文のテーマについてお聞かせ下さい。

黒田 博士論文は、実験的には動力伝達軸系、つまりトランスミッション、プロペラシャフト、後車軸というようなところの過渡振動と定常振動の両方を測定しました。主なものは、振動数と振幅とか、経時的なものや、過渡的なものは時間系列的な波形の測定とか、そういうこともやりました。学位論文のテーマは、多自由度振動系を分割して扱う方



法という名前で、あまり自動車に特定したものではありませんでした。実験は自動車の動力伝達系の振動をやりましたが、理論研究がその基にあり、多自由度振動系の固有振動とか、強制振動の定常解とかを研究する場合の理論的な扱い方を何とか作ろうという目的がありました。それを実際にあ

てはめて、自動車の自由度の多い振動系の解析と結び付けたかった。

近森 そうですね。いきなり自動車に結び付けると汎用性がなくなってしまう。昔は、一般的な考え方の応用例として自動車があるという考え方でしたが、その方が本格的な進め方のように思います。

黒田 なるほどそうですね。論文数は1編でもいいという話もありましたが、2編ぐらいは機械学会論文集で採用された内容でないと博士論文を通さないという慣例のようなものがありました。審査は、細かい問題はありませんでしたが、審査委員4人の合議制によるものでした。このようなことで、機械学会論文集に2編投稿しましたが、その後この2編が Bulletin にも掲載されました。内容的には、20自由度～40自由度ぐらいまでの集中定数系の振動解析であれば、理論式の展開も、数値計算も何とかできるのですが、当時は、コンピュータはほとんどありませんでした。卒論は津田先生、大学院は亙理先生でしたが、亙理先生の研究室には小さなコンピュータがある程度でした。そんな状況ですから、集中定数系の解も、アナコンで解を出すなんてこと、線を結ぶようなやり方でしたが、楽しくやっていました。当時は、手回し式のタイガー計算機でしたが、多自由度振動系の分割的な取扱い方というのは数値計算できないのではないかと心配したものです。ところが、亙理先生の関係で、トヨタ自動車の計算機で計算をすることができました。東大の計算機は使いませんでした。その後も、受託研究を受けた方は、自動車会社の研究センターなどを利用していると思います。

近森 先生の博士論文の中身は、その後発達してきたビルディングブロック法とか、あるいはトランスフォーマトリックス法という、部分的に分割して後から結合するという、そういう基本的な思想ではないかと思えます。

黒田 おっしゃるように基本的な考え方があります。振動問題は、サスペンションの上だけ、タイヤの部分だけとか、部分的な問題を扱えばよいという場合は、その取り上げる振

動系の空間的な広がりを入為的に我々研究者が設定することになります。路上の自動車のエンジンを始動させますと、その振動が空気振動にもなつて外へ発散します。また、タイヤを通して地面を振動させて、地球全体が振動する、大げさに言えば、そういうことになります。ただ、これら全てを工学解析の対象にはできませんので、考察の対象を空間的に限定します。その場合、空間的な境界、取り上げる部分と取り上げない部分の境界条件というものを物理的、力学的に、あるいはそれを式で表した場合にどういふふうになるかという、境界条件の設定が非常に大事だし、難しいと思います。それで、自動車が揺れたら、タイヤを通して地球全体が振動するからと言われたら、地球全体の振動と自動車の振動を同時に解くことになり、できることではありません。集中定数系と連続系が一体になったような、非常に難しい系を扱うことになるわけです。

近森 先ほどの博士論文のお話は難しくて理解できなかったのですが、がちがちのエンジニアリングというよりも、何となく哲学的な香りのする話だと思いました。分割するという基本的な思想があるけれども、機械的に分けるのではなく、ある考え方のもとで境界条件を設定する、そういうようなフレキシブルな広がりを持ったお話だと感じたのですが。

黒田 おっしゃる通りです。多自由度系というのは、まとまりのある部分的な固まりが幾つか集まったものです。自動車でしたら、トランスミッション、プロペラ軸、後車軸、タイヤなどの部分です。独立して1つの部分系だけを取り上げる場合は、環境設定をしなければならぬ。大きく言えば空間的な内と外の関係、力学的な内と外の関係というように、2つ関係している境界には設定条件が必要です。つまり、境界は止まっているが、その外は動いている。しかし、ほんの少ししか動いていないから、静止しているとみなしてもいい境界。それから、もう1つは力学的に内外で力のやりとりがある。そういうことで、境界条件を力学的、あるいは式の上で設定できるような部分系を観察して、取り出していくということから始めました。

近森 多分そういうところが、我々自動車屋からすると、何となく哲学的な香りがするお話だと感じました。

黒田 部分系についてある条件のもとで解き、それを今度は全部境界を通して結合します。そして、境界条件をそれぞれの部分系について修正を行う。そしてまた、各部分系の解を求める。それを何回か繰り返して行きますが、全体の大きな系を、もし厳密に解けたとした場合の解といますか、実験の測定結果といますか、そういうものにだんだん近くなってくると考えたわけです。理論的にもあるフォームを作りあげて、それを数値計算でもやってみました。実際には逐次計算法と呼んでいます。近似解を逐次厳密解に近付けていくという、そういう考え方は応用数学には昔からありましたが、それを今のような部分系の解と結び付けたということです。

-
- 近森** 基本的には、摂動法とか、あるいはFEM（有限要素法）もそうですね。
- 黒田** そうです。
- 近森** 結局、コンピュータがないと、実際に解くのは非常に難しい話ですね。
- 黒田** その通りです。だから、今でも理論的な体系は完成しているとは思っていませんが、何とか実用性のある数値計算に結び付けたと思っています。博士論文の審査は4名でしたが、亘理先生以外の方にはなかなかご理解いただくのが大変だったという記憶があります。
- 近森** しかし、そういう基本的な考え方が非常に革新的であったと思います。
- 黒田** そうかもしれませんが、ただ、エンジニアリングの面からは、あまり有効な研究だと思われなかったという気がしております。その後、その研究を更に進めることにはならず、非線形振動の解析のほうに中心が移っていきました。
- 近森** そのような基本的な考え方をまとめてドクターを取られたということですね。自動車技術会にはドクターを取られる前から入会されていますね。その辺の経緯をお聞かせ下さい。
- 黒田** 修士課程に入るときに、亘理先生から言われまして入会しました。研究発表や論文投稿があるので、やはり学会に入る必要があるということでした。それで、亘理先生が自動車技術会に深くかかわっていたので、徐々に私もかかわるようになりました。
- 近森** 入られたのはいつ頃ですか。
- 黒田** 修士課程に入るときですから、1958年ですね。
- 近森** 自動車技術会で活躍をするのは、卒業されてからですか。
- 黒田** 研究発表を聞いたり、会誌を勉強したりはしていましたが、論文投稿や委員会活動などはかなり経ってからです。

□ 成蹊大学時代

- 近森** そうすると、卒業されてすぐに成蹊大学に行かれたのですか。
- 黒田** 当時、成蹊学園創立50周年記念事業として工学部が創設されました。東大生産技術研究所に自動車と関係の深い平尾先生、亘理先生、石原先生がおりましたが、成蹊学園とも関係が深かったので、成蹊学園に行くように勧められ、行くことになりました。当時の吉祥寺は田舎でして、殆ど店も家もなく田圃のようなところを20分位歩きました。成蹊大学は、医歯学進学課程のプレメディカルコースはありましたが、基本的には政治経済学部の単科大学でした。
- 近森** そうですね。医歯学の進学課程もありましたね。
- 黒田** その医歯学進学課程の先生方も加わって、1962年4月に工学部ができました。私が成蹊大学の工学部に行ったのは1964年4月で、工学部が出来て3年目、つまり最初の3年生が誕生したときでした。当時は、高度成長期でもあり、産業界はエンジニアを求
-

めており、文部省も工学部の設置を進めていました。そのため、日本中の大学が教員を求めており、ある程度自分で選択ができるほどでした。今では考えられないような恵まれた状況でした。それで、成蹊大学工学部の教員になりましたが、工学部が創設されて2年しかたっていなかったもので、任された授業の数が多くて驚きました。全部で7科目やらされました。

近森 7科目はすごいですね。

黒田 講義ノートや実験装置などありませんから、朝から晩まで講義ノートや実験装置を作るのに追われていました。しかし、当時は男性1人、女性1人と2名の助手が付いたので大変助かりました。現在は教授2～3人に1人の助手ですから、大変ありがたい時代を過ごしたと言えます。しかも、教員を確保するという意味もあり、30代のうちに海外研究員として派遣してくれました。私は、カナダ・ハミルトン市にあるマクマスター大学に行きました。当大学には非線形振動で有名な W. K. TSO 教授がいて、客員研究員を募集しておりましたので応募したところ合格しました。1,000ドルのほかに研究費もくれました。また、学園からは給料の他に最大200万円までは研究費が支給されました。

近森 学園からも支給されたのですか。

黒田 学園から支給されたのは100万円か、150万円でした。先方で支給される1,000ドルは別でした。

近森 その頃の1,000ドルは円にするとかなりの金額ですね。

黒田 1ドル300円ぐらいでしたから、30万円になりますね。

近森 そうですね。

黒田 マクマスター大学には13ヶ月間在籍しましたが、非線形振動の理論的な展開と数値計算などの研究をしました。この間、自動車の振動には一切タッチしませんでした。この大学は、計算センターが充実しており、非常にいいサービスを提供していました。自動車会社の計算機を利用したときと比べても、はるかに研究者の



負担が軽かった。しかも、計算料は無料でした。

近森 無料ですか。

黒田 そういう環境でしたので、膨大な計算結果を数表や図面にして出力しましたが、現地では纏めきれず、日本に持ち帰りました。しかし、あまりにもデータが多く、うまく纏まりませんでした。計算機というのはやっかいですね。

近森 コンピュータのスピードには、頭の方が付いていかないですね。

黒田 帰国後、しばらくは大学で一所懸命に教育研究に携わっていましたが、研究費を使い切っていなかったということで、海外研究の費用が捻出できました。そこで、パリでFISITA（国際自動車技術会連盟）を訪問するとか、人的交流を試みようということになりました。丁度運よく、東大での指導教授であった亘理先生の親友であるエンジン関係の機械力学の先生がパリ第六大学におられたので6ヶ月間の研究出張をしました。当時のパリ大学は第一、第二・・・という呼称で、理工学部は第六でした。つい先日、パ



リに行きましたので訪ねてみましたが、すでに研究所はありませんでした。生産技術研究所のような形態に変わったようです。2度目の研究出張でした。内燃機関の振動問題についての研究グループに加わりましたが、半年間でしたので実際に実験に携わる研究はできませんでした。その後は、研究出張はしておりませんが、最後のほうは、自費で行きなさいということで、旅費は大学からは出ませんでした。

□ 自動車技術会とのかかわり

近森 帰国されてから、自動車技術会での活躍がはじまったということですね。

黒田 専門は振動工学でしたが、自動車技術会から呼ばれたのは、振動騒音部門委員会ではなく、会誌編集委員会でした。恐らく、当時、自動車技術会の理事や出版担当理事などをおやりになっていた亘理先生の推薦かと思います。

近森 会誌の編集委員長をやられたのは、何年頃ですか。

黒田 会誌編集委員長は1977年から2年間やりましたが、その前に副委員長を2年やっております。また、JSAE Reviewの編集委員長も1982年から2年間やりました。ニュース

編集管理委員会の委員長は1986年から6年間やりましたが、これは、当時、編集担当理事をやっておりましたので、ニュースの委員長もやることになったのだと思います。編集担当理事の6年間は、出版物の発行などに首を突っ込んでおりました。

近森 いろいろな出版物の中でも、JSAE Reviewの編集については、随分ご苦労されたとお聞きしております。

黒田 そうですね。英文論文集はどこの学会も苦労されていると思います。日本の工学系の研究者は英文で書くのを苦手としています。理数系の方は、逆に英語で書くのが当たり前になっています。JSAE Reviewの編集に携わったとき、自分もそうですが、英文を書くのが苦手な人が多かった。しかし、外国の方に読んでいただくには、それなりの英文にしなければいけないということで、英文の添削を専門家をお願いしました。一時期、編集委員が担当したときは大変でした。

近森 編集委員がやるのは大変です。

黒田 自分の専門分野以外の論文もありますが、なるべく分野の近い委員2名で内容をチェックした後、英文のチェックを専門家をお願いするという二段階で行っていました。

近森 中身をチェックして、英文添削までやるとなると、件数もありますし、これはもう大変でした。

黒田 私は、物理、数学、英語の能力は優れていなかったのですが、好きでした。「好きこそ物の上手なれ」という諺がありますが、あれは嘘ですね。

近森 確かに、そのような諺がありますね。

黒田 好きでしたが、年を重ねるとともに能力不足を痛感しました。しかし、英語、語学一般が好きだったので、大学では英語、ドイツ語、フランス語を選択しました。卒業後も大学院時代から英語の学校に通いました。その後、日ソ学院、日仏学院に通いロシア語、フランス語を勉強しました。ロシア語を勉強したのは、振動工学がロシアにおいて応用数学とともに発展していたということがありました。そういうことで、JSAE Reviewの仕事は大変でしたが、英語は嫌いではなかったもので、何とか切り抜けることができました。

近森 英語やフランス語をやられたことが、先ほどの留学先と関連があるのでしょうか。

黒田 ありますね。カナダへの留学のときは、市主催の英語の勉強会に通っていました。それから、フランスへの留学のときは、アリアンス・フランセーズに通いました。しかし、語学は女性の方が優秀ですね。会話などは実によくうまくなる。専門の振動については、かなり経ってから、1986年から2年間だけ委員長をやりました。

近森 振動騒音部門委員会の委員長をおやりになられた。

黒田 その間だけは、専門の振動工学に関係していましたが、それ以外は専門とは離れた活動でした。

近森 編集担当理事をされているときに新しいハンドブックを出されましたね。

黒田 編集担当理事としては、論文集を年2回から3回に、JSAE Review を年3回から4回に発刊回数を増やしています。また、全面改訂を行った自動車技術ハンドブック（全4分冊）の発刊を開始しました。なお、自動車用語辞典の発刊を前提とした検討委員会を設置しましたが、この委員長は近森先生にお願いをしました。この用語辞典は、その後1997年に発刊されています。

近森 そうですね、やらせていただきました。

黒田 それと、総務担当理事を3年間やっていますが、何をやったのか思い出せないのですが。

近森 これは、学自研（学生自動車研究会）を担当されたのだと思います。

黒田 そうですね、思い出しました。学自研副会長をやっておりました。学自研の担当役員は、総務担当理事を充てようということでこのような立場になりました。確か、1992年のFISITA大会だと思いますが、新しい試みとして学生会員を派遣しました。

近森 ありましたね。確か、学生が論文を持って行き、学生自身が発表するというものでした。

黒田 ロンドンで開催し、学生7名を派遣しましたが、費用は自動車技術会が負担しました。私も同行しましたが、質疑応答など、できるところは全て学生がやるのですが、司会進行や質疑応答には、一部私もかかわりました。日本人は英語が下手だと思ったら、さらに下手な英語で堂々と話す方もいました。私もそうだったのですが、日本人は下手だと自信なくおどおどした話し方をしますが、外国の方は下手でも物おじしないしゃべり方をしていたのが印象的でした。学生の派遣は今も続いていると思いますが、なかなかいい事業だと思います。それと、当時はFISITAも発展途上にありましたので、自動車技術会もかなり力を入れていました。そのようなこともあり、FISITA 1994大会、FISITA 1996大会と二度にわたってTC（Technical Committee）対応委員会の委員長をやりました。それから、自動車技術会の創立50周年が1997年でしたので、1994年に記念事業準備委員会委員長を、1995年からは記念事業委員会委員長をやりました。それと、当時は財政状況が厳しかったこともあり、事業の再構築を行う必要があるということで、学術活動リストラWGの委員長もやりました。リストラWGという言葉に違和感がありますが、委員会の改廃・新設がなかなかできないとか、委員長が長期間固定されているなどの問題があり、その解決策を検討したので、そのような名称になったのだと思います。また、同時に自動車技術史推進委員会の委員長もやりました。

近森 自動車技術史推進委員会の活動が発端になって、今日のインタビューも行われているようです。

黒田 その通りです。当時、通産省（現 経済産業省）には産業技術に係わる資料等を文化遺産として残そうという動きがあり、各産業界へ協力要請がありました。自工会（日本自動車工業会）に対しても打診があり、自工会では、自動車技術会が適任ということになり、自工会の支援のもと自動車技術会でやることになりました。創立50周年記念事業委員会の委員長もやっていたので、記念展示会「くるまぎじゅつの半世紀」

を実施することになりましたが、同時に自動車技術史の事業の一環として通産省が中心となり「産業技術歴史展テクノフェスタ 21」が同じ年の夏に開催されることとなりました。産業技術



歴史展の方は、自工会の要請によるものですが、基本的な展示内容を記念展示会と一本化することにより、記念展示会の方もかなり立派なものになりました。また、先ほどの話しの中に出てきましたが、1991年に近森先生が委員長となり、自動車用語辞典の発刊が提案されました。しかし、当時は財政的にもかなり厳しい状況でしたので、発刊には到らなかったのですが、創立50周年記念事業として1997年に発刊することができました。最近では、2003年に自動車騒音調査研究委員会の委員に顔を連ねておりました。これは、環境省からの受託事業絡みで、特別な事情がありました。それまでは、運輸省、現在は何でしたかね・・・

□ 政府系機関等とのかわり

近森 国土交通省ですね。

黒田 そうですね、それまでは運輸省でした。以前から、環境庁（現 環境省）などいくつかの役所との関係で、振動ではなく、騒音関係の委員長を長くやっておりました。私の研究室は振動工学でしたが、後継者の橋本竹夫教授が騒音工学でした。そんな関係から、政府系の委員会では、振動はほんの少しで、殆どが騒音関係をやっていました。委員長でしたので、殆どは委員の方々が仕事をなさっていたのですが、二、三十年にわたってやっていました。

近森 そんなに長いことやっていたのですか。

黒田 騒音の論文などは殆どないので、少し恥ずかしい気もしますが、やっていました。

近森 一般的には、公害という見地からは、振動よりも騒音の方が大きかったですからね。

黒田 そうですね。そういうことになります。

近森 この自動車騒音調査研究委員会は、国交省絡みの委員会ですか。請負事業ですか。

黒田 確か、環境省からの請負事業でした。委員長は、石濱先生⁶⁾でしたが、産業界、学会、

行政庁をうまくまとめていかなければならないということがありまして、私も委員になりました。

6) 石濱先生：石濱正男氏（神奈川工科大学教授、自動車技術会正会員）

近森 そのようなことに関連して、製造物責任相談センターに広がったということですか。
黒田 自動車製造物責任相談センターは、経済産業省の所管で1994年に公布された製造物責任法（PL法）により設立されたものです。この法律は、製造物の欠陥による被害者の保護を図ることを目的としており、相談センターは、産業ごとに1つ設置することになっています。既に、20ぐらいのセンターができていますが、自動車は第1号か第2号かで、率先して創りました。設立して十六、七年経過していますが、設置当初の経緯はよく知りません。

近森 今までのお話をお聞きしていて、やってこられたことと少し違う方向の話ですね。
黒田 少し法律的にこのセンターの目的を説明しますと、製品関連事故の未然防止及び公正・迅速な被害者救済を図るために、製造物責任に関する紛争の適正な処理に資する活動を行うこと、となります。事業としては、4つばかりやっていますが、1つは相談です。センターには、専任のエンジニア、相談員がおります。2つ目が、和解の斡旋で、相談よりも少し難しい案件です。3つ目が、私が関係した紛争の審査です。相談や和解の段階でおさまらないものが上がってきますが、件数は少ないです。殆どが和解の段階で収まります。最近専任の相談員が大変いい仕事をしてくれます。もちろん専属の弁護士もお願いしております。4つ目が、内外関係機関との交流及び協力になります。同じような目的を持ったセンター的なものがありますが、そこでの交流、協力です。例えば、消費者センターがありますが、ここには消費者が苦情や質問を持ち込んだりしますので、当然、自動車についてもあります。この段階で話が済まない、製造物責任相談センターになりますので、交流、協力が必要になるということです。

近森 これとリコールは関連するのですか。

黒田 リコールとは直接的には関連しません。リコールが起きているかどうかにより、審査委員会や相談内容への対応は変わってきますが、リコールとは直接の関連はありません。

近森 そうすると、こちらの方は、どちらかという個人を対象にしているということですか。

黒田 そうですね。申し立てを行うのは個人が多いですね。もちろん、製造所、工場、オフィスを代表して質問が来ることはあります。和解とか審査になるのは、やはり会社などの組織との関係で出て来ます。

近森 なるほど。

黒田 それから、消費者の方は、実際に運転した方とか、自動車を所有している個人ですが、それを受けるのはカーメーカー、販売店ということになります。

近森 間に入って仲介するのですね。

黒田 1994年の発足時の審査委員は、法科・社会科学系の大学教授が4人、理工系の大学教

授が2人、消費生活アドバイザーが2人、弁護士5人の合計13人でした。この13人を6人と7人に分けて2つの委員会が独立して審査しておりました。全体会議も年に2回程度開催して意見交換をしておりました。



近森 2つの委員会が並行して審査するのですか。

黒田 そうです。したがって、理工系の大学教授は2人しかいませんので、1人ずつ分担しています。発足時には、理工系大学教授としては、私の他に早大の斉藤先生⁷⁾が委員に就任されていました。斉藤先生は、自動車技術会の副会長をおやりになったと思います。

7) 斉藤先生：斉藤孟氏（早稲田大学名誉教授、自動車技術会・元副会長/名誉会員）

近森 はい、副会長になられました。

黒田 斉藤先生は、私よりも一回り上の年齢ですが、大変お元気な方で今でも会合等には出てこられます。審査員の任期は3年なのですが、任期が切れると任命されるということのを繰り返して長期間審査員を続けることになりました。かなり以前に、斉藤先生は80歳を過ぎていたので辞めさせて欲しいといったのですが、その後も辞めさせてもらえず、結局数年前まで委員でした。そんなことがありまして、我々委員で審査員の定年制を作りました。設立時の16年前から審査員をやっていたのは、私ともう1人の先生の2人でしたが、この定年制により退任しました。16年やっていたので、いろいろな苦情の申立人と直接、間接に関与しました。そういう意味では、非常にやりがいのある仕事でしたが、相談内容は振動騒音問題に限りませんでした。振動騒音問題はめったにありませんでしたが、壊れたのは振動が原因だという話は結構ありました。検証しなければならない問題は、センターが費用を出して日本自動車研究所などに実験を依頼しました。予算も十分組んでありました。その実験結果を受けて、審査委員会をやりました。製造物責任相談センターは、日本にも20ぐらいあることを先ほど申し上げましたが、自動車については、相談センターの中でもいい仕事をしているとユーザ

一からも評価されております。持ち込まれる問題は大変難しくなっており、大変ではあります。外国にも同様のセンターがありますが、日本のようには活動できないようです。アメリカだと州によって法律が違うので1つのセンターでは扱えない、欧州ではEUになったのもっと大きな問題が発生しています。そのようなことで、外国のセンターの方が日本のセンターを視察にきているようです。審査終了後の解決書は、法律で公表することになっています。

近森 Webで公表していますね。

黒田 審査委員の名前も公表されますので、審査委員は嫌がらせなどを心配していました。実際にありましたね。私も一、二件、利用者側、生産者側の両方からありました。

近森 両方からですか。

黒田 こういうのはけしからんじゃないとか、もう一回検討してくれよとか、別に生命に危険を感じるようなものではなかったですが、やはりホームページで公表されると、誰でも見られますので、このようなこともあります。

近森 そうですね。

黒田 審査員の中には、この範囲は出さないでくれというような注文を付ける方もおりました。それと、斉藤先生の後任には神本先生⁸⁾が就任しています。

8) 神本先生：神本武征氏（ものづくり大学学長、東京工業大学名誉教授、自動車技術会・元会長／名誉会員）

近森 エンジン関係の先生ですね。

黒田 そうですね、エンジンです。それから、私の後任は、東大の須田先生⁹⁾です。

9) 須田先生：須田義大氏（東京大学教授、自動車技術会正会員）

近森 お二人とも自動車技術会でご活躍いただいている方ですね。ところで、処理件数は何件ぐらいですか。

黒田 年間3,000件ぐらいです。

近森 全てに目を通すのですか。

黒田 いや、違います。殆どは電話や来室されての相談で終わります。最終的に審査となるものは、何件もありません。

近森 殆どは相談で終わるのですか。

黒田 そうです、殆ど相談段階で終わります。ただ、リコール制度が世の中に広まったという大変ですが、問題になるようになってから、相談センターの仕事も増えてきました。

近森 審査員を16年間おやりになったということですが、先生はJARI（財）日本自動車研究所の審査登録センターの運営委員もかなり長く務めておられたとお聞きしていますが。

黒田 1993年にJARIの理事になりましたが、年に何回かの理事会と評議員会が開催されます。理事は50人程度、評議員は200名以上いたと思います。

近森 役員は、自動車技術会と同じような規模ですね。

黒田 JARI の評議員は、JARI の運営を盛り立てている産業界から、社長さんなどが選任されています。社長が交代すると、評議員も交代するような仕組みのようです。理事会は、ディスカッションして何かを決めるというようなことはなく、常勤の理事が数名いますので、実際の運営方針等はそこで決まっています。理事会は法律的なオーソライズをする機関というイメージです。理事の一定割合は大学から出る必要がありますが、理事就任を拒む先生方もいらっしゃいます。私は任命されたら嫌だと言わないので、未だに理事を続けております。そのうち、審査登録センターの運営委員会にも加わるようになりました。運営委員会の委員長は早大の斉藤先生でしたが、PL センター（自動車製造物責任相談センター）と同じようなニュアンスで、斉藤先生から委員長のバトンを引き継ぐことになりました。運営委員会は、自動車技術会で言えば担当理事会のようなもので、センター活動の全分野にわたり、基本的な事項を審議し案を決定します。委員は現在 13 名で、行政／学識経験者 4 名、環境団体／消費者団体代表者 4 名、産業界代表者 4 名、JARI-RB 代表者 1 名です。扱っているのは、ISO 9001 の品質マネジメントシステムと ISO 14001 の環境マネジメントシステムです。これらのマネジメントシステムは、日本ではあまり必要ありませんでした。しかし、日本製品を輸出する際、輸入者側から、登録されているかというような質問が来るようになりました。そこで、JARI にも登録センターを設けると仕事にもなるということで創設しました。ただ、JARI 以外でもこのようなセンターが出来てきましたので、運営は年々難しくなっています。お客さんは審査登録料の安いところに移ってしまうので、JARI のお客さんは減少気味になり、非常に困っています。年間予算は数億円で、専任の方の人件費は含まれていますが、審査委員会等は学会と同じなので費用はかからないと思うのですが、厳しくはなっているようです。

近森 登録センターには、専任の審査員は何名いるのですか。

黒田 審査登録の申し出がありますと、その案件に対する審査委員会がその都度設置されます。委員はあらかじめ登録されている大勢の方々の中から選んで依頼します。審査委員会がまとめた報告書は判定委員会に上げられ、



合否の最終判定をします。審査委員、判定委員は大部分非常勤の登録されている方々です。審査委員、判定委員は産業界で20年、30年にわたって活躍された方で、運営委員会で制定した資格基準を充たした方々です。これらの方々には、相当な日当を支払っていますが、案件数が減れば、収入が減るが、費用も減るとい形になっています。しかし、ここ二、三年は審査件数が減少気味なので悩んでおります。JARI としても止めるわけにはいかないということで、3つ目の項目としてISO 50001（エネルギーマネジメントシステム）をやろうということが政府関係からの話になっています。

近森 それは、今の節電とかに絡んでくるのですか。

黒田 そうです。しかし、これが環境マネジメントシステムの内容と非常にオーバーラップしています。

近森 その通りですね。

黒田 それで、現在、運営委員会で検討していますが、政府の方針と、世界の動向により決めようということになっています。しかし、環境マネジメントとエネルギーマネジメントの両方の申請があったら、2倍の審査料をいただくのではなく、二、三割増しの審査料にするなどの話が出ています。社会の必要性からすると、エネルギーという問題が大きいので、やはり大事だという認識になっています。

近森 そうですね。今、まさにやらなければならない事柄かもしれませんね。

黒田 運営委員会は、年に二、三回開催されますが、JARI としては珍しく激論がかわされる委員会です。委員は、自工会の代表者が名尾副会長兼専務理事、消費者センターからも2名の方が就任しており、大変鋭い質問をされます。この審査登録センターはPLセンターと同じで、客観的に、まあ第三者機関的な立場でやる必要があります。その意味では、運営は結構難しいというか、面倒なこともあります。まもなく、エネルギーマネジメントシステムも取り上げることになるかと思えます。

近森 発足するのですね。

黒田 そうということになると思えます。

近森 これ等の（携わってこられた）業務に関連して、感じられたことがあればお伺いしたいと思えます。

黒田 そうですね、PL相談センターも、審査登録センターも、関係してみても感じましたのは、やはり法律との関係がおろそかにできないということです。法律を理解するのは非常に難しく、必要に応じて調べたりもするのですが、結局は専門家に説明していただき、何とか理解するという事です。例えば、PLセンターの審査委員会で問題になるのは、やはり言葉の解釈です。例えば、製造物とは何をいうのか、欠陥というのは何のことかなどです。それから、製造物の通常使用期間、耐用年数、耐用期間という言葉もそうです。また、通常予見されるような使用形態とか、そのような言葉が法律に出てくるのですが、これが難しい。

近森 通常というのは漠然としてわかりにくいですね。

黒田 具体的に、このケースはどれに当たるのかが、なかなかわからない。そこで、大事なことは何かという話題になりましたときに、これは裁判と同じで、判例集だということになりました。過去 50 年、100 年の判例集で、新しい問題が出てくると、これは過去のこの判例が利用できるとか、参考にできるということになるそうです。PL センターも、審査登録センターも、相談や審査などをする場合、やはり過去にどのような問題をどのように扱ったかを見て行く必要があると思います。それをさらに発展充実させる必要があれば修正していくというような、そういうことが非常に大事なのではないかという気がいたしました。

近森 PL センターも、審査登録センターも、そういうところが必要なのでしょう。

黒田 自動車も、情報通信機能が付加されるなど、何か個人のオフィスのようなところが出てきましたが、PL センターもどこまで扱えるのか、扱えないのか、範囲が広過ぎて手に負えなくなるのではないかと危惧しています。

近森 確かに、そうですね。他に、何か付け足すことはありますか。

黒田 もう大体お話ししたように思いますが、政府系の委員会としては、1994 年から日本自動車輸送技術協会の使用過程車騒音実態調査検討委員会委員長を、1997 年から環境庁中央環境審議会、1999 年から環境庁のタイヤ騒音の実態調査検討会議をやりました。それから、国交省と環境省の使用過程における改造自動車の騒音対策手法等に関する検討委員会の委員長を 2002 年から 3 年間やりました。これは、自動車を購入したユーザーが、直ぐにマフラーなどを改造してしまう。その改造自動車を警察で取り締まる方法を検討したのですが、なかなか解決しない問題で大変でした。

□ シャンソンに魅せられて

近森 それから、黒田先生というと、シャンソン抜きには語ることはできないというイメージですが、シャンソンに興味を持たれたのはフランス語からなのか、シャンソンそのものなのか、その辺りからお話しをお聞かせ下さい。

黒田 子供の頃から、演歌からはじまって、クラシック音楽まで、すべての音楽が好きでした。一番初めに習った楽器は、中学から大学にかけて 7 年間ほど、クラシックのバイオリンを習いましたが、先生が亡くなったので止めました。大学 2、3 年までやっていたと思います。一番上達した時点で、カルテットの第 2 バイオリンというスプリングソナタのメロディーを弾いていましたが、その後はやっておりません。歌うだけではなく、弾くほうも好きでした。その後、管楽器が好きになって、サキソフォンをやりたいといったら、まずクラリネットをやりなさいというので習いに行きましたが、あなたは唇を閉める力が弱いから、管楽器は向かないと先生に言われて首になりました。クラリネットがだめだったから、サキソフォンは無理ということであきらめました。

母は、高等小学校の先生でオルガンを使っていましたので、子供のころからオルガンは自宅でいじっていました。ピアノを20年ぐらい前、30年前かな、購入して、自分で勝手にピアノを弾いていました。20歳の頃から銀座にあったシャンソン喫茶の銀巴里に通いましたが、そこはコーヒー1杯でシャンソンが聴けるお店でした。その頃、シャンソン、カンツォーネ、それからラテンの音楽などをやっている店がありました。学生時代にシャンソンを聞きに行っているときに、私の師匠になった宇井あきら先生の仲間が、発表会的な会を銀巴里でやっていたのを聞いていました。その関係で、突然先生を訪ねて、年をとっていますが入門できないかとお願いしました。

近森 何歳ぐらいのときに言われたのですか。

黒田 40歳ぐらいのときですね。その頃に宇井先生の門下生にさせていただき、それから二、三年間、先生の得意とする曲、200曲ぐらいですが、週1回程度習いに行きました。さらに二、三年たった頃に、訳詞をやってみないかと言われました。先生の弟子は百数十人いましたが、先生自身は、作曲と歌唱指導をしていました。ポップスというか、演歌だという人もいますが、菅原洋一が歌って歌謡大賞を受賞した「今日でお別れ」の作曲者です。門下生のうち、男性は20名、女性は100名ぐらいです。

近森 女性が多いですね。

黒田 先生は、フランス語が得意な人はフランス語で歌ってもいいが、日本人にはなかなか理解できないし、よさが分かってもらえないと言っていました。フランスの有名な歌手が日本で歌うのはすごくいいが、日本人で一生懸命フランス語を勉強してフランス語で歌おうとする人がいるが、そういう人はあまり歓迎しないとも言っていました。理由のひとつは、男性はいくら練習してうまくなっても、お金を払って聞きに来てくれる店に雇われることは難しいということでした。私は、全くそんなことは思ってもいなかったのですが（笑）。いい訳詞をすれば、先生が弟子達に勧めるのでやってみないかと言われました。まあ、先生にとっては弟子のレッスン料が入るということもありますね。学生時代にフランス語の勉強をしていましたが、フランス語の勉強をし直すと同時に、訳詞もやろうということになり、40歳代半ばに一大決心をしました。

近森 それは、凄い決心ですね。

黒田 それからは、先生のところへ行くときは、自分の訳詞を持っていき、先生に歌い方のレッスンをつけていただくとかくことを、ずっと続けました。1986年に第1回目のコンサートを開催しました。毎年1、2回開催しますが、自分の訳詞の曲だけのコンサートです。大きい会はシャンソンコンサートとして、小さい会はシャンソン探訪会として開催しています。コンサートは、300~400人収容できるabc会館ホールや中野のZEROホールでやりました。歌手も十数名、私も1~2曲は歌います。探訪会は、数十名から150名の大田区立のアプリコの小ホールで創立以来10数年開催しています。コンサートは、来年21回目となりますが、3月に新装した銀座のヤマハホールで開催します。

6年ぶりに多数の歌手が出て、数人の演奏者も出ます。私も出ますが、みなさんと同じように1, 2曲しか歌いません。先月、5月に17回目の探訪会をフルーティストのフルートと私のピアノの弾き語りで行いました。フルーティストはもう20年近く私の伴奏をやってくれています。コンサートと探訪会の両方で合計37回、私の訳詞による公演をしました。曲数は200曲を超えますが、最近は訳詞が増えなくなりま



した。私が訳詞をするのは、学生運動が盛んだった60年代、70年代のものですが、その頃の作詞作曲者が半分以上、亡くなってしまいました。また年齢的にも80歳代、90歳代になっていますので作品が出てきません。曲は、パリの専門書店、楽器店で曲集を購入してきます。1つの曲集で10~50曲ぐらい収録されたものを、先月は11冊買ってきました。買ってくると、自分のピアノで全部弾いてみて、メロディーやリズムから選曲します。その次に、大まかな訳詞をしてさらに選曲を行います。そして、残ったものだけを、非常に時間とエネルギーを注いで訳詞をしますが、これを二、三十年やってきました。私が訳詞した曲を歌ってくれる方は、宇井先生の門下生が多いのですが、全国で数十名います。お金をとって歌っている方が多いですが、趣味で歌っている方もいます。CDに収録して売り出した方もいて、CD売り場で見かけることもありますが、大体あまり売れません。普通の楽器店では売れ筋しか置きませんので、300枚とか、1,000枚程度のものは置いてもらえません。お金を出して置いてもらうことはあ

りますが。

近森 私も、黒田先生のコンサートへ何回か行かせていただきました。

黒田 そういう意味では、周りの方々にご迷惑をおかけしており、申し訳ないと思っています。
(笑)

近森 話しをお聞きしていると、黒田先生が訳詞したり、歌ったりされている範囲というのは、何かあるひとつの範囲がやはり何となくあるなという感じがしました。

黒田 そのとおりです。

近森 自分で聞いて、それで自分に合う、自分が好きなものを選曲する。名曲とかではなくて、ある一定のゾーンというか、一定の方向があるのだと思いました。

黒田 おっしゃるとおりです。有名になって、既に世の中に流布している曲は、扱わないことにしています。有名な訳詞家とか作詞家を作って、有名な歌手が歌っているものは、今さらやることはないという思いです。また、やってみても広まる可能性もありませんので。しかし、有名な曲で、訳詞が間違っているとか、テーマを変えてしまってメロディーだけを使っているとかいうものがあります。そうすると、歌手によっては、原詞に忠実な訳詞で歌いたいという方がおられて、訳詞してくれませんかと頼まれることも結構あります。そういう曲が、二、三十曲ありますが、私の訳詞は出来たてなので二、三人にしか歌われていない、昔の訳詞で歌われている方の方が多いということがあります。

近森 先生のおやりになってきたことをお聞きすると、まず振動から始まり、その振動がベースになって、PLセンターなどでご活躍された。それと並行して、シャンソンの訳詞をして歌われるというのは、何かの縁^{えにし}でそれぞれが繋がっているような気がします。

黒田 たまたま、シャンソンがフランスで、パリにあった FISITA を訪ねたいと思ったり、パリ大学に留学したり、研究所を見学したりと、確かに何か因縁があるような気もしますね。

近森 パリ大学に行かれた頃から、シャンソンを始められたのですか。もっと後ですか。

黒田 数年後ですね。しかし、好きだったので昔から聞いていました。師匠の宇井先生が2年前に亡くなり、歌い方を指導する先生がいなくなりました。宇井あきらとレザマンドラシャンソンっていうグループの幹事長を私が数年やったこともあります。先生も亡くなりましたので、離れています。10年ぐらい前からは作詞をしています。作詞したものを宇井先生が作曲したのですが、その後は作詞も作曲も手掛けています。全音楽譜出版社から、宇井あきら作曲/黒田道雄作詞の作品集、黒田道雄作品集を発売しました。作詞・作曲は、いまでも時間があるときにやっておりますが、訳詞の方は、先ほどお話ししましたように対象となるものがなくなってきましたので、あまりやっておりません。甘い演歌に近いような感じがするフェデリック・フランソワという人の作品、20曲ぐらいの訳詞をしています。これは男性のシンガーソングライターなの

に、女性が歌っても違和感がないというような男女間の恋愛感情を歌った作品ばかりです。シャンソンの場合、男性の言葉の歌か、女性の言葉の歌かで分かれます。訳詞をした場合、原詞にそって訳詞する場合と、原詞は男性の言葉の歌ですが女性の主語に変えて訳詞する場合があります。私の曲の中には、もともと男性がつくった男性主体の歌なのに、女性の主語に変えているのが結構多くあります。ブラッサンスの曲は、殆ど変えることができないので男性のままつくっています。しかし、「幸せな恋などはない」という曲は女性に変えて作っていますが、違和感なく、女性にも男性にも歌われています。私自身も好きな歌です。このように、訳詞という仕事は非常に多くの問題をはらんでいますが、やり出すとおもしろくてやめられません。

近森 これは私が提案して採用されたのですが、自動車技術会の関東支部報に「シャンソンへの憧憬」という表題でお書きいただきましたが、読ませていただきますと、戦争というか、戦いに関連するものが多いと思いました。やはり、戦争とか、そういうものに対する先生の思いが出てきているのでしょうか。

黒田 そうですね。ただ、反戦活動とか、学生運動をしたことはありません。シャンソン自体が、60年代、70年代の反政府運動みたいな変革を求める社会的な流れを反映していたのは確かです。そういう意味で、訳詞をした歌手も、多くの方は一つか二つの反戦歌と言われるようなものを作っています。恋愛歌を作っている方がよく売れますし、そういう方が殆どですね。反戦歌ばかり作っているような方はいません。その辺が、フランスのシンガーソングライターの特徴だと思います。関東支部報で例に挙げた曲には、ご指摘いただいたとおり、反戦歌的なものが多かったかもしれません。

□ ほどよさの追求

近森 先生は、歌とか、そういうものを通じて、若い世代に何かを伝えようとされているところがあるのではないかという感じがします。今まで、先生が会誌などに書いてこられた年頭のあいさつとか、50周年記念事業委員会委員長としてのあいさつなどで、新しい出発点にたって、これからの方向などを語られていますが、このようなことも多分いろいろと伝えるべきことを考えられている結果としてではないかと思うのですが。

黒田 一般的な話しになりますと、会誌に執筆しました「程好さの追求」¹⁰⁾があります。これがある意味で、私の生き方の中のひとつであるし、若い人にも、生き方というか、そういうもので悩んだり決めたりするような場合に言いたいことのひとつです。ほどよさという言葉が適切かどうかは分かりませんが、要するにどんなことでも行き過ぎるとだめになるわけです。小さ過ぎても、大き過ぎてもだめ。貧乏過ぎると死んでしまう、お金持ち過ぎるとだめ。何でも量的なものには、小さいほう、大きいほう、広いほう、狭いほうがありますが、限界があります。人間がよい生き方をするためには、ほどよさということが大事であるということ、あらゆる面で感じながら生活してき



たと言えます。それで、会誌に書いたのは、操作ボタンや活字、振動音の大きさとか、移動するときの速さとか、企業規模、世帯構成員の数などを例にあげ、ほどよさを追求したらどうだというようなことを書きました。書いてから17年ぐらいたち

ますが、今でも同じような感じを持っています。

10) 程好さの追求 (会誌「自動車技術」1994年6月号掲載)

- 近森** そうですね、このほどよさというのが、黒田先生らしいなという感じがしました。
- 黒田** このような考え方は、要するになまぬるいとか、手ぬるいよと、言われる可能性が非常に大きい。教授会や委員会での議論で、おまえ、そんなにむきになるなといわれます。私は、言いたいことは言わせていただく、ただそれを取り入れられなかったからといって、ひねくれたり反対行動を起こしたりはしません。大勢がきまれば、協力できることは協力するという考え方です。そういう意味では、あらゆる場面で言いたいことを控える、日本的なある意味の謙虚さを、あまり追求するというか、求め過ぎると言いたいことも言わなくなる人もいると思います。しかし、そういうことではなくて、言いたいことは言い、研究半分、生活や遊びが半分というようなことです。ということで、何かと何かのバランスというようなことは、やっぱり常に感じながら生きてきたような気がします。
- 近森** 学内のことになりますが、学科会議で、英語に特化し、英語を主体にしていこうという話が出ましたが、そのとき黒田先生は英語だけに特化するのではなく、フランス語、ドイツ語もあるから、特化するのには疑問があるという話をされました。今お聞きしたほどよさというか、バランス感覚というか、このような心得が必要であろうというお話ですが、今の日本も原子力に特化するのではなく、再生可能エネルギーとのバランスが必要とされています。これらの間には一つ相通じる哲学というか、思想があるみたいな感じがしますね。
- 黒田** 英語について話しますと、成蹊大学にきたときから、自分の専門分野については英語で

授業が行える程度の語学力は絶対に備えるべきであると言ってきました。当時は、年配の方が多くこともあり、全くだめな人が多かった。その後も言い続けてきましたが、未だに日本はあまりそういう方向には進んでいませんね。

近森 そうですね。

黒田 英語は、世界共通語なので、好き嫌いではなくて、道具としてある程度やる必要があると思います。その上で、中国語や日本語をやってもいいですが、日本語でなければ発表できないというのは、グローバリズムな時代では少し問題ですね。

近森 その通りですね。

黒田 先ほどの近森先生がおっしゃったことは、確かにその通りだと思います。

近森 お話を聞いて、黒田先生のイメージというか、思想というものがえてきたような感じがします。ドクター論文もそうですが、全体はひとつとして見ているが、その構成要素の境界は無理に決めず、自然体（ほどよき）に任せる。このような渾然一体となったものが、大きなながれになっているのではないかという気がしています。

黒田 おっしゃる通りかもしれません。子供の頃、星を見るのが大好きでした。父親にねだって、望遠鏡で空を見たりしていることがありましたが、最近の作詞、作曲にも天空のことを歌ったものがあります。いまだに私は、相対性理論とか、原子物理学を理解できない。これは、理論式上も難しくて分からないのですが、哲学的、理念的にも理解できない。境界がないように思っていると、私の親友で凄い理論物理学者がいるのですが、その彼に言わせると境界はあるよというようなことを言うのです。しかし、どうもわからないのです。境界があつたら、そこには境界条件があつて、その外も……、まあ、僕のドクター論文なのですが。

近森 そうですね、つながっていくわけですね。

黒田 だから、そういうことで、やはり無限の広がりというようなことを何となく残しておきたいという意欲があります。

近森 そういうふうな観点にたつて今の若い人を見ると、一所懸命になるときはなるのですが、決め付けてしまう、もう自分で自分の周りに境界をつくってしまう。ここはやるけれども、ここはやらないと、思っていないのかもしれませんが、結果的にそういうふうになっている傾向が多分にあるような気がします。

黒田 なるほど、そうですね。

□ 若者へ

近森 黒田先生の生きざまというか、今までの生き方の中から、若い人に対するメッセージを頂戴できませんでしょうか。

黒田 一言でいえば、とにかく好きなこと、一生やってみたいと思うようなことを1つではなく、2つ、3つぐらい見つけることです。まず、そのような仕事を1つ見つけること

があります。仕事人間として我々は生きるわけですから、なるべく早い時期に定年退職しても興味を持てるような仕事ができれば一番幸せなことです。学生時代に決めるのは難しいですが、何か1つだけで終わらないことが必要だと思います。私は、趣味が多過ぎると怒られます。運動神経がダメで、運動は全部ダメですが、卓球は大好きで趣味としてやりました。それから、岩登りも冬山にも行きませんが、夏山が大好きで、スキー山岳部の顧問を20年もしました。また、大会に出ると予選で落ちてしまうのですが、競技ダンスも大好きで、20歳代から5年も10年も教習所に通いました。競技ダンスはいまだに大好きで、競技ダンス部の顧問も何十年もしました。自動車も大好きですね。それと、苦手な能力がないと分かっていますが、山歩き、歩いていると、みなさん抜いていきます。学生と一緒に行くときは、ペースが合わないのが、3,000メートル級の北アルプスの雲ノ平でキャンプしたりするときは、学生に先に行かせて、私は2日目に着くように行きます。1人だけで10時間ぐらいかけて登って行きます。その後、自分1人だけで下りてしまいます。そんなことで、自分の能力に合わせて、一生の趣味としてやっています。まあ1つだけではなくて、仕事を含めて2つ以上のことをやっていくのだという、お金ではなく自分が好きだから情熱を注げるという、生きがいに通じるそういうものを是非みつけていただきたいと思います。

近森 そうですね。結局、1つの境界の中へ引っ込むのではなくて、境界が沢山あって、その間の境界条件も考えながら、トータルとして楽しまなければいけないということなのでしょうね。

黒田 私は、大学院の頃に恋愛関係に陥り、事実上結婚しまして、両親及び指導教授からけしからんと言われました。何とかアパート代の一部を内緒で母親から援助してもらって、あとは2人のアルバイト的な仕事で生活費を稼いでいた時代があります。その頃から、私は女性も専門の仕事を持つべきであると考えていました。妻も仕事はしていましたが、専門の仕事をするべきであると言って、結婚してから大学院に行かせまして（と言うと怒られますが）、その後、私と同じように大学教授になりました。20代の頃から、やりたいことはやるべきであり、人生の中で仕事を持つとか、やりたいことを持つことは、お金になるかどうかではなく、女性にも大切なことであるという考え方でした。そうすると、家事、育児は分担しなければならないということになりますので、私は、20代から家族の料理、買い物をして、料理を作り、洗い物をするということを何十年もやっています。まあ、今日もやってきましたが。そういう生き方は、私の年代では、賛成してくれる人は非常に少ない。今月はこれでやれと行って、食費を女房に渡すということを、未だに言っている人がいます。

近森 私は、黒田先生に年代的に近いですが、黒田先生と違い、我々の年代は大体がおっしゃるようなことですね。

黒田 私は、食費や育児費など、必要な経費は完全に二分しています。まあ、片方が赤字にな

るような収入でしたら助ける必要がありますが。もうすぐ50年になります。最近はいろいろな結婚の形態も認められるようになり、複雑な世の中にはなっていますが、今の若い方にも、参考にして欲しいです。私の訳詞の中にも、有名なシャルル・アズナブールの原作で、「ある種の男」という非常に売れている曲があります。この曲は、ある特殊な男性の生き方を歌っています。一言でいうと、どのような人と一緒に生活するにしても、生活共同体としては、夫婦は少なくとも同じように責任を持って生活すべきではないかということです。これは、若い人に申し上げたいですが、なかなか実現は難しいようです。

近森 しかし、最近はそのような考え方に近づいているように思えます。

黒田 そうですか、そうだと嬉しいです。

近森 我々の年代がダメなのですよ。

黒田 そうなのでしょうね。

近森 黒田先生の生き方から、若者への提言をお聞きしましたところで、予定の時間も過ぎましたので、インタビューを終了させていただきます。本日は、お忙しい中ご足労いただきありがとうございます。



